一八八三年六月二日（土）

カルカッタの信者の家における聖ラーマクリシュナ

カルカッタのバララームとアダルの家における聖ラーマクリシュナ

タクール、聖ラーマクリシュナは、南神村(ドッキネーショル)のお寺からカルカッタにおいでになった。

先ずバララームのお家に行かれ、それからアダルの家を訪問される予定である。その後でラームの家にも行かれるだろう。アダルの家では、マノハル・サイ主導のキールタンが催されることになっている。また、ラームの家では神話の朗詠(ろうえい)が行われる。今日は土曜日、ジョイスト月二十日、黒分十二日目。キリスト暦一八八三年六月二日。

タクールは馬車で揺られながら、ラカールや校長はじめ信者たちにおっしゃる――「なァ、あの御方が愛せるようになれば、ツミだろうとゴミだろうと、みんな吹き飛んでしまうよ。太陽の熱で、野っ原の池の水が干上がっていくようなものさ」

〔出家と在家における世俗への執心〕

「世間のことや女と金に気が引かれているうちはダメだ。出家したって、世間への執着があったら何にもならん。ツバを吐いて、またそのツバを呑みこむようなものだよ！」

しばらくおいてまた、馬車のなかのタクールは続けて話される。「ブラフマンの原理を勉強している人たちは、形に現れた神（人格神）を認めない。

アハハハハ、こう言うんだよ、ナレンドラは――あんなのは木偶（デク）人形だって！　『あの人（タクール）はまだ、カーリー堂なんぞに通っている』なんて言ってるそうだ」

〔ナラ・リーラー（神の人間としての行動）を見た聖ラーマクリシュナの喜び〕

タクールはバララームの家にお入りになった。

タクールは突然、前三昧状態になられた。一切の生き物と世界になってそこにおられるのは神ご自身であり、神そのものが人間になって歩いていらっしゃるのを観（み）られたからであろうか。宇宙の大実母に向かって話される――「大実母（マー）、何というものを見せてくれる！　静かにして！　それにこんなに！　ラカールや何かをよこして、いったい何を見せてくれる。色も形も消えていった。それ、マー、人間はただの袋か箱だ。意識はあんただけのものだ。

大実母（マー）、現代のブラフマン（原理）哲学者は甘露の水を飲んでいないよ。目も乾いているし、口も乾いている！　愛の信仰がなけりゃ、何にも出来やしない！

大実母（マー）、あんたに頼んだね。誰か友だちをよこしてくれって――わたしのような友だちを。だから、

ラカールをよこしてくれたんだね」

〔アダルの家におけるハリ讃歌(キールタン)〕

タクールはアダルの家においでになった。キールタンを始める用意ができていた。

アダル家の応接間には、大ぜいの信者たちや近隣の人々が、タクールにお会いするために集まっていた。皆はタクールのお言葉を聞きたがっていたので、タクールは話された。

聖ラーマクリシュナ「世間であくせく暮らしているのも、解脱して自由になるのも、二つとも神様の思召(おぼしめ)しだよ。この世にわれわれを無智の状態でお置きになったのは、ほかならぬ神様なんだからね。そして、あの御方がその気になって呼んで下さると、解脱できるというわけだ。子供が外で遊んでいると、ごはん時(どき)になって母親が呼ぶだろう。

あの御方は、誰かを解脱させる時期がくると、聖者(サードゥ)や修行者(出家・在家を問わず修行して霊格の高い人)と交際するようにおさせになる。そして、あの御方に会いたくて居ても立ってもいられないようになさる」

近所の人「先生、居ても立ってもいられない気持ちというのは、たとえば、どんな具合になるのでしょうか?」

聖ラーマクリシュナ「職を失った勤め人みたいな気持ちさ! 毎日、役場や会社を廻って歩いて聞くんだ。『あのう、どんな場所でも結構ですから、仕事の空席(あき)はないでしょうか?』とね。居ても

立ってもいられなくてジタバタするんだよ。こうなると、やがて神様に会える。

ノビノビと脚を投げだして、お坐りあそばして、キンマの葉をゆっくりとお噛みになっておもむろに神について思い巡らす、というような調子では到底、神さまには縁がないね!!」

近所の人「サードゥと交際すれば、神に対する渇仰心が起こるのでございますか?」

聖ラーマクリシュナ「ああ、そうなるとも。だが、偽善者はだめだ。修行者が持って歩く水壺(カマンダル)は、主(あるじ)について四大聖地を廻っても、苦いのはやっぱり苦い!」(訳註――昔の水壺(カマンダル)は苦い瓢簞(ひょうたん)で出来ていた)

やがて、キールタンが始まった。歌い手は、愛人と別れた嘆きを唱った。

ラーダー「ねえ、お友だち、私は死にそうよ。お願いだからクリシュナを連れてきて!」

女友達「ラーダーのところにクリシュナの黒雲は雨になって下ちるところだったのに、お前の心にもない強がりで、光の雲となって天に昇ってしまった。お前は、クリシュナのためを思わないのね。だから、あんな素振りをするのね?」

ラーダー「ねえ、お友だち、あの強がりは私のものじゃなかったの。あの誇りは、あの人といっしょに去ってしまった!」

女友達のラリタがラーダーに代わって語っている。

(うた)

すべてのすべてを捧げても

どんなに私はうれしかったか……

川辺に　野に　ここかしこに
かの人の姿　わが目に映る！

こんどはキールタンのなかでの語り。歌い手が語る――ラーダーの女友達がラーダークンダの湖の近くでクリシュナを探し廻った。そのあと、シュリーダーマ、スダーマ、マドゥマンガラがヤムナーの岸辺でクリシュナと出会えたこと、クリシュナとブリンダの語らい、クリシュナがヨーギーの服装をしたジャティラに会った時のこと、ラーダーが差し出したお布施、それから、ラーダーの手を見たヨーギーが占って危機を予告したこと――。

キールタンは終わった。タクール、聖ラーマクリシュナはさっそく信者たちとカーティヤーヤニー(大実母の別名)の話をなさる。

〔The Humanity of Avatars(神の化身の人間性)〕

聖ラーマクリシュナ「牛飼い(ゴーピー)乙女たちはカーティヤーヤニーを拝んでいた。あらゆるものは、あの大現象(マハーマーヤー)、根源造化力(アディヤシャクティ)の支配下にあるんだよ。神の化身たちでさえ、マーヤーの力を借りて活動なさるのだ。だから、そういうお方たちは根源造化力を礼拝なさる。ほら、ラーマを見てごらん。妻のシー

ターのために、どんなに嘆き苦しんだことか――『五大（パンチャ・ブータ）（五元素＝地、水、火、風、空）のワナに捕（と）らえられ、ブラマー（創造を司る神）さえも悶え泣く』だ。

悪魔ヒラニヤークシャを退治すために猪（しし）（ヴィラーハ）に化身した神様（ヴィシュヌ）は、役目を果たされた後も自分が何者なのかすっかり忘れて、赤ン坊に乳を吸わせていた。シヴァ大神が三叉（みつまた）の鉾（ほこ）で猪（しし）のからだを壊して下すった。それでやっと、その御方は天上にお戻りになった。シヴァ大神が訊ねた――『お前さん、どうして自分が誰なのか忘れていなすったのかね？』すると、その御方は答えた――『だって、とても幸せな心持ちになっていたから――』」

アダルの家からタクールは、シムリヤのマドゥライ通りにあるラームの家を訪問された。そこで朗詠者（カタク）（バラモン階級の聖典朗詠家）が朗読するウッダヴァの物語をお聞きになるのである。ラームの家には、ケダルをはじめ大ぜいの信者が来ていた。

ラーム・チャンドラの家でのキールタンの楽しみ

ラーム・チャンドラは医学博士の課程を終了してから、医科大学の化学試験官補になった。後に、彼は科学協会の化学の教授になった。彼は自分が得た収入で家を建てたのであるが、そこでお祭りを催した時に、タクールは何度もおいでになっている。だから今では、そこは信者たちにとって大へんな聖地になっている。ラーム・チャンドラは、師（グル）の恩寵によって家住者として、求道生活を率先しているのだ。タクールは折ある毎に、口をきわめて彼をほめていらっしゃる。そして、次のようにおっ

しゃる――「ラームは自分の家を、信者仲間のための場所として提供してくれて、その上、いろいろと面倒を見てくれる。彼の家はみんなの集会所のようだ」と。ニティヤゴパール、ラトゥ、ターラク(後のシヴァーナンダ)などは、ラーム・チャンドラの家を、まるで自分の家のような顔をして出入りしていた。長い間泊まりこんでいることもあった。また、その家では毎日、ナーラーヤナの礼拝をしていた。

ラームはタクールに、ボイシャク月の満月の日――クリシュナをたくさんの花で飾り付けるお祭りの日、この宿屋のような家にはじめて来ていただいた。彼は殆ど毎年のように、この日にタクールをお招きし、信者たちを集めて大きな祭りをしている。ラーム・チャンドラの子供のような弟子たちが、その後もずっとこの定まった日に祭りを催している。

というわけで、今日、ラームの家は祭りなのだ！　尊い聖師(聖ラーマクリシュナ)がいらっしゃるのだ。ラームはシュリーマッド・バーガヴァタの永遠の言葉をその御方にお聴かせするべく、用意万端ととのえていた。やや狭い中庭はきれいに飾ってある。壇もしつらえてあって、その上に朗詠(カタク)者が坐っている。シュリーマッド・バーガヴァタの中からハリシュチャンドラ王の物語が始まったころ、バララームとアダルが家のなかからタクールを御案内してきた。中庭でお待ちしていたラーム・チャンドラは、前にすすんでタクールの御足の塵を頭にいただき、それからタクールといっしょに歩いて壇の正面に行き、前もって決めてある席にお着かせした。周囲はぐるりと信者たちが取り巻いている。すぐ横には校長がいる。

〔ハリシュチャンドラ王物語とタクール、聖ラーマクリシュナ〕

ハリシュチャンドラ王の物語(訳註1)が語り進んでいた。ヴィシュヴァーミトラは言った。「王(マハーラージ)よ！　私に、海に囲まれたこの国土すべてを賜(たまわ)ったからには、この土地に君の住む場所はないのだ。だが君は、聖地カーシー（ベナレス）には住むことができる――あの大いなる神の土地にね。行きなさい。君と、君の妃シャイビヤと、君の子息とをかの地に送り届けてあげよう。あそこで君は、私への献金をかせぎ給え」こう言って、尊者(バガヴァン)ヴィシュヴァーミトラは王たちを連れて聖地カーシーに向けて旅立った。やがてカーシーに着き、一同は宇宙の主神シヴァ（ヴィシュヴェーシュヴァラ）に参詣した。

宇宙の主神シヴァにお参りする話が出かかるとすぐ、タクールは前三昧状態になられ、〝シヴァ〟〝シヴァ〟とつぶやいていらっしゃる。

ハリシュチャンドラ王は、約束の献金をかせぐことができなかった。その結果、妃のシャイビヤを売ってしまった。息子のローヒタ・アシュヴァもシャイビヤと共に行ってしまった。朗詠者は、買主であるバラモンの家でローヒタ・アシュヴァが花摘みをする話。そして、そこで蛇に咬まれた話を語

（訳註1）ハリチャンドラは慈悲の権化のような偉大な王であった。彼の所に行って手ぶらで帰って来る者は誰もいなかった。そこで聖仙ヴィスヴァーミトラは、王の慈悲心の程度を試してみようと思い、王から自分の願ったものを何でも与えるという約束を取り付けた。そして聖仙は、ハリチャンドラが統治している海で囲まれている国土のすべてを要求したのだ。すると王は何のためらいもなく自分の国土を与えたのだ。ヴィスヴァーミトラはさらに加えて献金まで要求し、これによって初めて王の慈善は信用され、称讃に値するものとなろうと告げた。

り続ける。蛇に咬まれたその夜、深い闇があたりを包むころ、息子はとうとう死んでしまった。葬礼をしてくれる人もいない。主人の年老いたバラモンは、寝床から起きてこようともしないのだ。シャイビヤはたった一人で、息子の亡骸を胸に抱いて火葬場へ向かった。折しも、雷鳴とどろき、稲妻は底しれぬ闇を裂いて駆けめぐる。シャイビヤは恐怖と悲嘆に打ちひしがれ、泣きながらよろよろと行くのだった。

一方、ハリシュチャンドラ王は全く献金をかせぐことができないので、とうとう自分を賤民(チャンダーラ)に身売りしていた。そして、火葬場の下働きになってうずくまっていた。わずかな駄賃で、隠亡(おんぼう)(火葬場で死体を焼く人)の仕事をするのだ。いままで死骸をいくつ焼いたことか。その火葬場たるや、闇夜ともなれば何と恐ろしい場所であろうか。シャイビヤがその場所によろけ込んできて、声を振りしぼって泣いた。その泣き声を聞いて胸を裂かれない人があるだろうか? 血の通った人間なら、心臓がつぶれる思いになる筈ではないか? 聴衆は一人残らず、オイオイと声をあげてもらい泣きしている。

タクールは? と見れば、身じろぎもなさらずに聞いていらっしゃる。ただ、両眼の隅に水の玉が膨れ上がっては、それが次々と降り落ちてくる。なぜ、お体を動かして声をたててお泣きにならないのだろう?

最後にヴィシュヴァーミトラがやってきて、王の心を試すためにしたことだと打ち明けてのち、ローヒタ・アシュヴァを甦(よみがえ)らせ、皆で大神シヴァ(ヴィシュヴェーシュヴァラ)にお参りし、王にもとの領土を返し、めでたし、めでたしということで朗読は終了した。タクールは長い間、壇の正面で神様の話を

聞いていらっしゃった。朗読が終わると、外庭に面した部屋に行ってお坐りになった。信者たちに周りを取り囲まれ、朗詠者も皆に交じって従いて行き、タクールの傍に坐った。タクールは朗読者に、「ウッダヴァ（クリシュナの友であり信者であった人）の言葉を、何か語っておくれ」とおっしゃった。

〔解脱と信仰――ゴーピーの愛――ゴーピー達は解脱を欲しなかった〕

朗詠者（カタク）は語った――

ウッダヴァがブリンダーヴァンに到着すると、牛飼（ラカール）いの男たち、牛飼（ゴーピー）い乙女たちはその人に会うため夢中になってかけ寄ってきた。一同は口をそろえてきいた。「クリシュナはどうしていらっしゃいますか。あの方は、どうして私たちを忘れてしまったのでしょう？　どうして私たちの名を口にしないのでしょう？」そしてある者は泣き出し、またある者はその人を連れてブリンダーヴァンのあちこちを案内して説明して聞かせるのだった。この場所でクリシュナがゴーヴァルダナ山を持ち上げたのです。ここがデーヌカ・アスラを退治したところ、ここがシャーカタ・アスラを退治したところ。この牧場でクリシュナは牛を遊ばせていた。このヤムナーの岸辺であの方はよく散歩していた。ここで牛飼いたちを相手に楽しく遊んだ。この辺の小さい森はみな、あの御方が牛飼（ゴーピー）い乙女たちと語らった場所です、等々……。

ウッダヴァは一同を見渡して言った。「あなたがたは、何故そんなにクリシュナのことばかり思いわずらっているのですか？　あの御方はあらゆるもののなかに宿っておられる。あの御方は、神そ

のものなんです。神を除いては何ものも存在しないのですよ」牛飼い乙女たちは答えた。「私たちには、そんな難しいことは何もわかりません。読み書きさえ出来ないんですもの。私たちは、ただ、ただ、このブリンダーヴァンに住んでいたクリシュナを、私たちといっしょに遊んでくれたクリシュナを知っているだけです」ウッダヴァは言う。「あの御方は神そのものです。あの御方のことだけを想っていれば、もう二度とこの世に生まれかわってくることはない。即ち、魂は解脱できるのです」牛飼い乙女たちは答えた。「解脱ですって？　私たち、そんな言葉さえ知りません。私たちの生命であるクリシュナに会いたいだけです」

タクール、聖ラーマクリシュナはこの話を一心に聞いておられて、非常に感動された御様子である。「牛飼い乙女たちは正しい答えをなすったよ」

こうおっしゃって、あの柔らかな美しい声調で歌いだされた。

解脱がほしいと言うのなら
わたし(クリシュナ)は気軽に与えもするが
けれども純な信愛を
ほしいと言われちゃ困るのだ
なぜならこれを獲た人は
あらゆるものに打ち勝って

すべての人にかしずかれ
三界の勝者となるからだ

チャンドラヴァリーよ、よくお聞き
浄(きよ)い信愛がどんなに強いか――
解脱を得るのはやさしいが
信愛を獲(う)るのはむずかしい
過度の慈善をいましめて
バリ王を地獄に送ったものの
彼の信仰にほだされて
わたしは地獄の門番になったよ

純な信仰はまたひとつ
ブリンダーヴァンの牧場(まきば)のはなし
きみたち牛飼い乙女(ゴーピー)たちだけで
他人は知らない秘密のはなし
浄い信愛にほだされて

チャンドラヴァリー――牛飼い女(ゴーピー)の一人

わたしはナンダの家に住み
ナンダを父と呼び仕え
頭に荷をのせ運んでいたよ

ナンダ――クリシュナの養父

聖ラーマクリシュナは朗詠者に向かっておっしゃる――

「牛飼い乙女(ゴーピー)たちの信愛は、聖愛(プレーマ・バクティ)の信愛だ。貞操堅固な信愛、不動の信愛だよ。貞操堅固でない信愛というのはどういうものだか、知っているかい？　知慧(ジュニャーナ)のまじった信仰だよ。クリシュナがすべてのものに成っておられる、あの御方が至高梵(パラブラフマン)であり、ラーマであり、シヴァであり、造化力(シャクティ)である、と思っているような信仰のことだよ。けれども、こういう知識は聖愛(プレーマ・バクティ)の信愛の中には入ってこない。ハヌマーンはドゥワラカに来て、『ラーマとシーターに会いたい』と言った。クリシュナはルクミニー妃に、『お前はシーターの姿をして坐っていなさい。そうしないと、ハヌマーンから身を護ることはできないぞ』とおっしゃった。(訳註――ハヌマーンは、ラーマとシーターを理想神、守護神に選んでいたから)パーンドゥの兄弟たちが、ラージャスーヤの祭祀(ヤジュニャ)(王家の捧げる祭祀。最高の支配者だけが執り行うことができる)を執り行ったとき、並みいる王たちは皆、ユディスティラを玉座に坐らせて平伏した。すると、ヴィビーシャナはこう言った。『私は、ナーラーヤナおひとりだけに頭を下げる。ほかの何ものにも頭を下げない』そのとき、クリシュナ自ら、ユディスティラに向かって地にひれ伏しておじぎをなすった。それでやっと、ヴィビーシャナは王冠をつけたままおじぎをした。

どういうことか、わかるかな？　家の嫁さんみたいなものだよ！　夫の弟や兄さんや、それから舅さん、みんなの世話をして足を洗う水をくんでやったり、タオルを手渡したり、坐り台を具合よくしてあげたりするだろう。だが、夫ひとりにだけは、ほかに特別な関係がある。

この、愛の信仰には二つのものがある。〝私〟と〝私のもの〟だ。ヤショーダー（クリシュナの養母）はいつもこう思っていた。この私がしなかったら、誰がゴパール（クリシュナの幼名）の世話をするだろう。私が気をつけてやらなけりゃ、ゴパールは病気になってしまうだろう、とね。ヤショーダーにとっては、クリシュナが至聖だという感じがしないのだ。それから、〝私のもの〟――私の知慧、私のゴパールというわけだ。ウッダヴァはヤショーダーにこう言った。『お母さん！　あんたのクリシュナは神の化身なのですよ。あの御方は宇宙の主なのです。普通の人間ではないのです』するとヤショーダーはこう答えた――『まあ、そんな宇宙の主のことじゃありません、私のゴパールがどうしているかきいているんですよ――宇宙の主じゃなく、私のゴパールです』

牛飼い乙女たちは、まあ何と堅固だったことか！　マトゥラーへ行って門番にさんざん頼みこんで、やっと宮殿の中にかけこんだ。門番はクリシュナのところへ皆を連れていった。ところが、王様のターバンをつけたクリシュナを見て、顔を伏せてしまった。そして、皆でヒソヒソ言い合った。『この、ターバンをまいてる人、誰かしら！　こういう人と話をしたら、私たち、あの方を裏切ることになるわね！　孔雀の羽を頭にかざって黄色い上着をきた、あの私たちの愛しい御方は、どこにいるのかしら?!』

ごらんよ、この堅信なことを！　ブリンダーヴァンでの情熱は、あれは特別なものだがね。人から

聞いた話だが、ドゥワラカのあたりの人たちは、アルジュナの友であるクリシュナを拝むそうだね。ラーダーは必要ないそうだ」

〔ゴーピーたちの堅信――知的信仰と愛の信仰〕

一信者「知慧のまじった信仰と、愛の信仰と、どちらがすぐれているのですか？」

聖ラーマクリシュナ「神様が大好きにならなけりゃ、愛の信仰（プレーマ・バクティ）は生まれない。それに、〝私のもの〟という知慧がね。三人の仲間が森に行って虎に出くわした。一人が言った。『みんな！　ここでオダブツだ！』もう一人が、『なぜ？　神に祈って助けてもらおう』すると残りの一人が、『いやいや、こんなことで、あの御方に面倒かけなくない。さあ、この木の上に登って助かろう』『もう、オダブツだ』と言った人は、我々を護ってくれる神の存在を知らない人。『神に頼もう』と言ったのは知者だ。神が創造、維持、破壊のすべてをなさるのだということを知っている。それから最後に、『あの御方に面倒かけたくない、木の上に登ろう』と言った人は、神様を愛し、神様が大好きなんだよ。その愛の性質は、愛するものより自分の方が強い、と感じていることだ。面倒をかけまいとするんだよ。好きな相手の足にトゲの一本も刺さらないようにするのが、この人の願いなんだ」

ラームは、タクールと信者たちを家の中に招じ入れて、いろいろな菓子や果物を出してもてなした。信者たちも大よろこびでこのお下がり（プラサード）を食べた。